

オンライン日本語教育で教師が直面している困難 —PAC 分析を用いたオンライン形式別にみられる教師の困難点—

Difficulties for Teachers when Teaching Japanese Language Online : Teachers' Difficulties by Online Format, using PAC Analysis

PHAM HOANG ANH

要旨

日本語学習者が年々増加し続けている一方、教師の数は需要に追いついておらず、また、国によっても、大都市か地方かによっても日本語教師の数と質の差がある。オンラインでなら、場所や時間を問わず教師の学習者へのアクセスの可能性が広がる。しかし、オンラインで日本語を教える際には対面授業と同様または対面授業とは異なる困難があると思われる。本稿では、オンライン日本語教育で教師が直面する困難についての質問紙調査をする過程にあたり、3名の日本語教師に対し PAC 分析を用いたインタビュー調査を行った。調査の結果として、様々な困難要因が判明した。重視すべき要点は、「コーススケジュールの設定及び授業の流れの設計」、「教材準備・作成」、そして「学習者の反応や理解度についての把握」に困難を感じていることが明らかになった。

キーワード：オンライン日本語教育、PAC 分析、教師の困難、オンライン教育の課題

1. はじめに

本稿では、オンライン日本語教育で教師が直面する困難についての質問紙調査をする過程で、予備調査として PAC 分析を用いて行ったインタビュー調査について報告する。西谷（2013）において、質問項目作成の予備調査として PAC 分析の手法が用いられている。PAC 分析は、質的分析とクラスター分析を組み合わせた研究法（内藤 2002）であり、三島（2011）は PAC 分析の効用として「これまであまり研究されることのなかった新しい研究対象に関する質問紙を開発・使用する場合、PAC 分析は極めて有効な方法である。PAC 分析を利用すれば、質問項目を抽出できるばかりか、質問項目の相互関係や、その背景にある概念についても捉えることができる。」と述べている。先行研究とインタビュー調査を基に、質問紙項目を作成し、アンケート調査を通して、オンラインで教える際に日本語教師が直面する困難について考察する過程として、本稿では、インタビュー調査の調査方法として PAC 分析の手法を援用することにした。また、先行研究で明らかになった困難要因の確認及び日本語教師が直面する困難要因の多様性を考えて、質問紙調査ではオンライン形式や日本語教師歴及びオンラインでの日本語教師歴別に協力者を選択した。

2. 調査概要

PAC 分析におけるインタビュー調査では、3 名の日本語教師（以下、教師 A、B、C）に、2020 年 6 月中旬～8 月初旬にかけて、Zoom でインタビューを行った。会話データは Zoom の録画機能を使用し、その後音声を文字化し Excel に入力した。

表 1 インタビュー調査協力者の属性と調査情報（調査実施時）

調査協力者	出身	性別	日本語レベル	日本語教授歴	オンライン日本語教授歴	オンライン形式	教育形態
教師A	ベトナム	女	N1	5 年	4 年	オンデマンド	クラス
教師B ¹	ベトナム	男	1 級	16 年	3 年	ライブ配信；オンデマンド；ミックス型	クラス
教師C	ベトナム	女	N1	2 年	2 年	ライブ配信	クラス

3. 調査手順

まず、3 名の調査協力者に以下の指示文を与えた。

指示文：あなたがオンラインで日本語を学習者に教えるとき、どんなことが大変でしたか。教えるとき、準備の段階、教えた後、学習者や教材、ツール、教え方について、なんでもいいので、「オンラインで日本語を教えるときの困難」という言葉を聞いて、思い浮かべるキーワードやイメージを思いついた順番から自由に書いてください。キーワードやイメージはいくつ書いても大丈夫ですが、できるだけ単語で書いてください。ただし、それが難しい場合は、少し長めに（10 字前後ぐらいまで）書いてもかまいません。

次に、調査協力者が書いたキーワードを自分にとって重要と思う順に並べ替え、項目間の類似度を 7 段階（類似度が最大：7、類似度が最小：1）で答えさせた。その後、統計ソフト（SPSS Ver.19）を用いて、クラスター分析を行った。その後、産出されたデンドログラム²を調査協力者に見せながら、キーワードのグルーピングによるクラスター分けをし、各クラスターに名前を付けてもらった後、調査協力者が感じたことを話させるという手順をとった。教師 B は日本語で、教師 A と C はベトナム語でインタビューした。

4. 調査結果

上記の手順で PAC 分析を行った結果、以下のようなことが分かった。

¹ 教師 B は、3 つの形式の経験がある。初めは、ライブ配信で 25～30 人／クラスで教えていて、その後、しばらく Facebook や Messenger を使ってライブ配信とオンデマンドのミックス型で授業をしていたが、現在はオンデマンドのみで教えている。

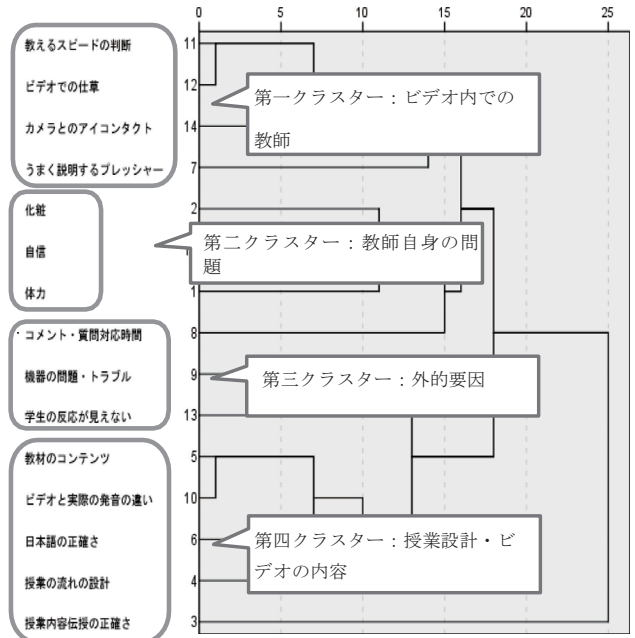
² デンドログラムとは、クラスター分析において各個体がクラスターにまとめられていくさまを樹形図の形で表したもののことをいう。

4.1 教師 A のインタビュー結果

教師 A は、クラスターが 4 つに分かれた (図 1)。

表 2 教師 A の記述

重要 度順		想起 順
1	体力	4
2	化粧	15
3	教えることの正確さ	1
4	授業の流れの設計	10
5	教材のコンテンツ	11
6	日本語の正確さ	12
7	うまく説明するプレッシャー	13
8	コメント・質問対応時間	8
9	機器の問題・トラブル	9
10	ビデオと実際の発音の違い	5
11	教えるスピードの判断	7
12	ビデオでのしぐさ	3
13	学生の反応が見えない	6
14	カメラとのアイコンタクト	14
15	自信	2



日本語訳は筆者による。各クラスターの語りは以下の通りである。

【第一のクラスター (重要度: 11、12、14、7): 「ビデオ内での教師の表現力」での語り】

「7. うまく説明するプレッシャーについては、自分ならこの説明で分かってても、理解が遅い学生だったら分からなかったり、この説明の仕方でもいいのかがいいつも疑問に思います。例えば、学生がよく混乱するのが音読みと訓読みなんですけど、理解が早い学生は、音読みならこう読み、訓読みならこう読む、とかって言ったらすぐに理解できるけど、理解が遅い子³には、漢字が 1 つで立っている場合はこう読み、漢字と漢字がくっついた場合はこう読む、とかって説明しないと分からないんです。これは大体 N3 までが多く、N2 以上になると、こういうのではなく、似たような表現がたくさんあるので、微妙に違うニューアンスとかあるんですが、説明するのが難しいのがたくさんあります、なので、それをどう説明するかも難しいです。12 と 14 は最初の時だけで、あとは慣れてきたら問題ないです。」

【第二のクラスター (重要度: 2、15、1): 「教師自身の問題」での語り】

「1. 体力については、クラスで教えるのと違って学生とのインタラクティブがなく、ビデオ

³ 学習者という意味。インタビューでは、「bạn」や「đứa」という言い方だったため、「学習者」ではなく「子」という表現を選んだ

の収録は一気にとるので最初から最後まで1人でしゃべり続けるし、講義の間は集中力がいるのでクラスでの授業よりもすぐ疲れるんです。クラスでだったら、5~10分教えたら学生を当てたり、課題をさせたりできて、その間に休めるので。2. 化粧はまあ、女子なのでね、男子と違ってすぐにそのまま収録とはいかず、化粧なしでカメラに映るとんでもない顔になって気持ち悪いのですが…でも化粧をしなければ、顔映りがよくないというのもあるんですけど、ビシッと決めていない、手抜きみたいになってプロじゃないんです。

15. 自信については、最初の時だけです。最初は慣れないので、恥ずかしくて、ベトナム語であいさつするだけでもあいさつできない感じで、3分のビデオを撮るのに1日かかりました。でも、やっているうちに慣れてくるので今は問題ではないです。」

【第三のクラスター（重要度：8、9、13）：「外的要因」での語り】

「8. コメント・質問対応時間については、学生がたくさんコメントや質問してくるので、私は返事せず、スタッフに任せてます。ただ、学生の質問に答えられるためには、スタッフ自身も教師のような知識を持たないといけないので、スタッフの育成は大変です。

13. 学生の反応が見えないというのは、クラスでの授業と比べてという意味で、学生とのインタラクティブがないので、学生の反応が見えないです。」

【第四のクラスター（重要度：5、10、6、4、3）：「授業設計・ビデオの内容」での語り】

「3. 教えることの正解さは、たくさん話していると、自分でも言い間違いに気づかないことがあったりします。例えば、「ベトナム人が」と言おうとしたのに無意識に「日本人が」っていったりすることです。これについては、ビデオ編集の時に気を付けるか、学生からのフィードバックがあった時に直すかです。直すときは、そこだけビデオを撮り直したりします。

6. 日本語の正確さも同じようなことです。ただ、日本語での言い間違いや読み間違いっていう意味。発音でとか日本語の知識でという意味ではないです。4. 授業の流れの設計はビデオをよりよくするために、世界中の授業の流れの設計とか、教え方とかを参考にするためにたくさん資料を見たり探したりするのが大変で、5. 教材のコンテンツは最初の時だけでした。最初の時は、他に教師がいなかったから自分で作ってみたい日本人を探したり色々大変でしたが、今は共同で教材づくりをしてくれるメンバーがいるので最初のころだけです。」

以上から、教師Aの場合、「教師の体力」が大きく問題視されている。これは、インタビューの最初から最後まで共通して取り上げられていた問題である。また、教師Aはビジネス面からもオンライン授業を見ており、オンデマンドでコースの講座をするとき、コースや講義の内容に必要な「豊富な知識と流ちょうな日本語」、オンデマンドに必要な器具、ウェブサイト運営などに必要な人件費などの「財政面」、そして膨大な時間がかかるために長期戦のための「忍耐力と覚悟」が必要だと言う。特に、「財政面」については、ウェブサイトを維持するためにも必要であり、たくさんの時間を使って準備しても生徒が集まらなかったり、売れなかったりした場合、教師のモチベーションが維持しにくいと言う。

4.2 教師 B のインタビュー結果

教師 B は、クラスターが 3 つに分かれた (図 2)。また、インタビューで重要度 6「学生の学習進捗」は 4 と 12 の近くにある方が正しいと教師 B から指摘されたため、重要度 6「学生の学習進捗」は第二のクラスターに入れた。

表 3 教師 B の記述

重要度順		想起順
1	教案作成	8
2	教材の選択	2
3	ビデオ作製	7
4	適切なツールの選択	1
5	学生の得た知識の確認	5
6	学生の学習進捗	3
7	学生のやる気の引き出し	12
8	コースの効率性	4
9	学費の支払い方法	10
10	効率的な募集方法	6
11	質疑応答の設け方	11
12	ユーザーの管理	9

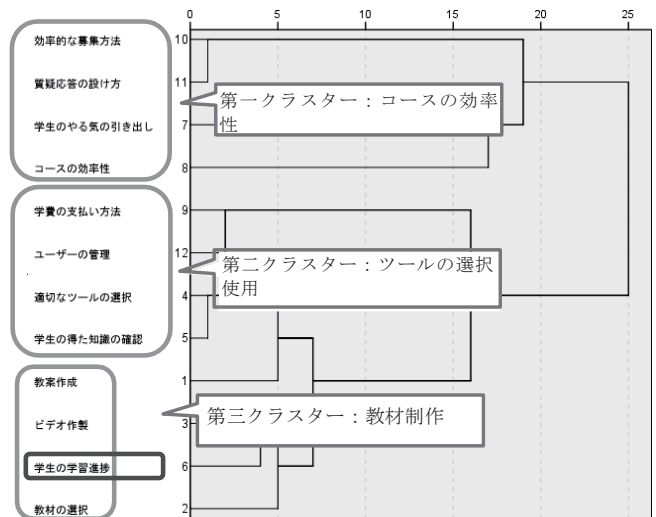


図 2 教師 B のデンドログラム

クラスターの語りは以下の通りである。

【第一のクラスター (重要度：10、11、7、8)：「コースの効率性」での語り】

「11. 質疑応答の設け方については、ライブの時は問題ありませんでしたが、統合の時とオンデマンドの時は質問がなかったですね。これはやっぱりやる気に関連しますよね。まじめな子はよく質問するんですが、そうでない子は質問とか全然しないので、ビデオを見ていないから質問しないのか、見てもわからないから質問しないのかはわかりませんが、たぶん見てないんでしょうね。」

7. 学生のやる気の引き出しについては、ずっと最初から今でも問題で、ビデオでは詳しく説明しているからおもしろいと言ってやる気まんまんの子がいるけど、お金払ってるのに、自分の都合で最後まで見ない子もいる。別にお金はもらえるからいいですけど、うれしくないですね。自分のビデオが悪いのか、フォローアップがたりなかったのか今でも悩んでいます。ただ、チャットでプッシュしたり、本人に聞いてみても、やっぱりこれは個人の問題ですね。難しいです。まあ、ビデオが面白くないから続けて見れないのかもしれないですけどね。ビデオをもう少し時間を短くするとか、色々直さないといけな

あるんですね。学生全員にチャットで聞いてどこまで見ているとか、フォローアップはしていて、みんな、ビデオは面白いといっているの、特に文の骨組みの説明とかは高評価ですけど、それでも見ない子もいるので。

8. コースの効率性については、1冊を徹底的にやっていて、もっと教材を増やしたいのですが時間がなくて、たぶんもっと教材を増やしたら効率性がアップするんじゃないかなと思います。あと、今練習とか作ってなくて講義だけなので、練習も入れたらみんなもうちょっとやる気が出るかもしれませんね。」

【第二のクラスター（重要度：9、12、6、4、5）：「ツールの選択使用」での語り】

「9. 学費の支払い方法について、国内にいる子とかだったらインターネットバンキングとか、Momo（デジタルウォレット）とか使って払ってくれるんですが、海外にいる子とか、日本とかね、日本からだと手数料とかがかかるからね、それだけでみんな戸惑っちゃうんだよね。それでやっぱりやめるという子もいるので。日本にいる子が多いんですよ。今、30人のうち、20人は日本にいる子とかね。N1の読解を教えるところはやっぱり少ないのですね。12. ユーザーの管理だと、例えば、転売とかですね。みんなでアカウントをシェアしたり、これはちょっと管理できないので困ってますね。6. 学生の学習進捗と5. 学生の得た知識の確認は、チャットとかでコミュニケーションしているんですけど、やっぱりどこまで勉強しているのか把握するのは難しいですね。常にコミュニケーションをしたり、試験の結果を聞いたりしているのですが、やっぱりチャットで聞いても本音を言わない子もいますね。なので、どこまで勉強しているか評価するのは難しい。ビデオを見るペースは学生に任せていて、まじめな子は1日に2、3ビデオを見たりするんですが、1日1ビデオとか、一気に見る子とか、見ない子とかもいるのでね、やっぱりがっかりしますね。でも、みんなそれぞれの理由があるから、会社の残業があるからとか、子供がいる子とか、日本の実習生とか多いので、1日12時間やってる子とか、農業やってる子とかね、いるので、強制はできないですね。」

【第三のクラスター（重要度：1、3、2）：「教材制作」での語り】

「教案はライブとオンデマンドの時は違いますね。ライブの時はある程度問題をのせてあとは説明して学生に聞けるのですが、オンデマンドだと、具体的ところ、1文字ずつ細かく書き出して説明しないとイケないのですね。3. ビデオ作製では、説明文で解釈とかね、文字を入れたりね、しているのですが、ようは、ビデオをおもしろくする、音声とか、技術上の問題ですね。時間かかるし、自分は得意じゃないし。」

教師Bの場合、重要度順では「教材制作」が最前線だったが、インタビューの全体を通して「学生のやる気」が最も問題視されており、オンライン授業はクラスの授業と違うため、学生のやる気をどう引き出すかについて考えながら取り組む必要があるとしている。また、学生のやる気に関しては教材制作が大きくかわってくると主張しており、「いつまで見ても飽きない面白いビデオ」がポイントになってくると考えている。

4.3 教師 C のインタビュー結果

教師 C は、クラスターが 3 つに分かれた (図 3)。

表 4 教師 C の記述

重要 度順		想起 順
1	学習者の心理的な抵抗感	10
2	学生の受講姿勢・態度のコントロール	4
3	双方の相互反応	2
4	学生の反応	1
5	PC スキル	3
6	テスト	11
7	クラスの会話練習	7
8	インターネット環境	5
9	宿題提出・チェック	9
10	音声、マイクのトラブル	6
11	雑音	8
12	休みやすい	12

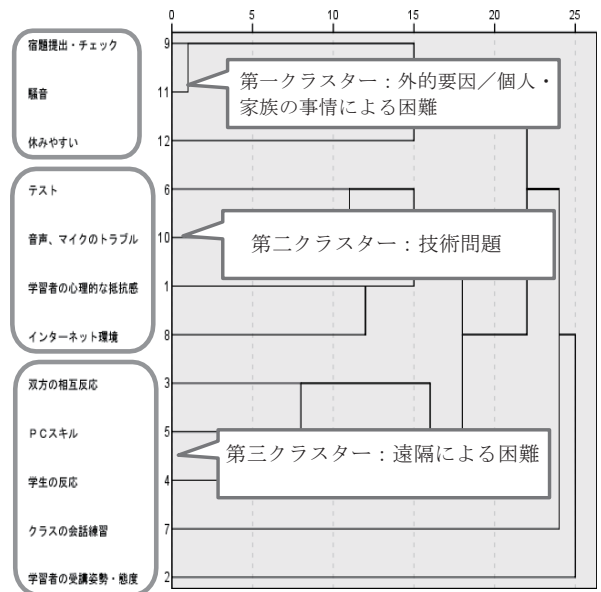


図 3 教師 C のデンドログラム

日本語訳は筆者による。各クラスターでの語りは以下のとおりである。

【第一のクラスター (重要度：9、11、12)：「外的要因／個人・家族の事情による困難」での語り】

「9. 宿題提出・チェックについては、対面授業とは違って、宿題をしない学生が多く、N1 のクラスとかはみんな自主的にやってくるんですが、レベルが低い学生、特に実習生とかは、他の教師の話によるとオンラインの方が宿題の提出率が低いんです。例えば、グループで課題を与えてオンラインで提出してもらっても出さない子がいたり。対面授業だとほぼ 90%は宿題をちゃんとやってきていて、宿題をしてこなかったら罰として立ちながら勉強するとか、腕立て伏せさせられるとか色々対策があるんですけど、オンラインだとそういう罰は与えられないので、宿題の管理ができないんです。それで、12. 休みやすいにつながったりするんです。また、オンラインだと、切り替えができないので。例えば、対面だと、服を着替えたり、靴を履いたり、クラスに来ることで学習モードに切り替えられるじゃないですか。でも、オンラインだと、ベッドの上で寝転がって受けていたり教師もベッドの上で教えていたり、もちろん、熱心で真剣には教えていますけど、やっぱり気持ち的に怠けちゃうというか、学習態度や姿勢がきちんとしていないので、休みやす

いんですよ。11. 雑音については、例えば、対面の場合、雑音があったらそこだけにとどまるんですが、オンラインだと、雑音はみんなに響いてしまって、そういうことが頻繁に起こるんです。マイクを普段はオフにして、発言するときだけオンにしてと言っても、なぜか誰かしらマイクをオンにして、後ろの雑音が入ってきたり、1つのクラスでそのようなことが結構たくさんあり、そのたびに授業が中断されてしまって。もちろん、強制的に私が全員オフにすることがあるんですが、毎回間に合うわけでもなく、授業がよく中断されて困ります。」

【第二のクラスター（重要度：6、10、1、8）：「技術問題」での語り】

「6. テストは本当に問題で、今でもどうすればいいかまだ分からないですね。N1、N2のクラスとかだと、問題のリンクを送って、私は時間を計ってやらせるだけで問題はないのですが、レベルが低いクラスとかだと、カンニングの問題があるので、リンクは送らず、画面共有で私の方でカンニングができないぎりぎりの時間まで計ってスクロールしている感じなので、本当に大変です。大学の授業では-googleフォームとかで選択肢問題をさせたこともあるんですが、やはりカンニングの問題があるので、小テストとかのみにして、期末などの大きなテストはすべて対面でできるまで一時中断しましたね。あと、教材や問題作りとか、練習させるのとかも、対面だと教科書があるので楽なのですが、オンラインだと、スキャンや写真を撮ったり、几帳面な先生だと自分でタイピングしたりしているので、時間もすごくかかります。」

10. 音声、マイクのトラブルについては、マイクが壊れていたり、何らかの問題で声がすごく小さくて聞こえなかったり、そういう時はもう完全にインタラクティブに影響しますね。マイクのオンオフの切り替えの仕方が分からない学生やチャットの仕方すら知らない子もいるので、インタラクティブにとっても支障が出ています。あと、マイクが壊れているという学生は本当に壊れているのか、ただ聞いていなかったから答えられないからマイクが壊れたって言ってるのかもわからないですしね。」

【第三のクラスター（重要度：3、5、4、2、7）：「遠隔による困難」での語り】

「4. 学生の反応も学生と教師の両方に問題があります。学生も反応しにくいし、教師も学生の反応が分かりにくい。例えば、クラス全体に対して質問しても、シーンってなることが多く、でもこれは答えが分からないんじゃないじゃなくて、反応が遅れるとかしにくいとかだと思うんです。例えば、対面だと、必ず、1人か2人かは反応するんですが、オンラインだとだれも反応しなかったり。質問を1、2回繰り返してやっと誰かの反応があったり。どうしても反応がない時は指名したりしているのですが、レベルが低い学生は特にこういう状態が多いですね。N1・N2のクラスだと少しはましになるのですが。7. クラスの会話練習について、Zoomでの会話の授業は特に難しく、私がZoomの扱いに慣れていなく、ブレイクアウトセッションの仕方が分からないという技術面の問題点もあります。できたとしても、ペアの練習をさせても全員の様子が見れるわけじゃないのでチェッ

クすることが困難だと思います。今は、私が 1 対 1、またはペアで会話練習をさせても、メインルームでさせていて、会話している子以外は聞いているだけなんですよ。効果的な教授法がまだ見つからなくて困っています。」

以上から、教師 C は、オンライン授業を始めた頃は、「教案作り」と「クラスのリズム作り」が最も大変だったと語っている。また、文字・語彙、文法の授業は問題ないが、読解では効果的な授業がまだできていないと言う。これはオンラインの問題ではなく、読解の教授法に困難を抱えていたからである。オンライン授業と対面授業の違いについて、オンラインの場合、学生に強調して提示したい時に、対面のようにすぐに下線をひくといったことができず、授業の効率を下げていると語っている。教師 C は、オンライン授業をする際に、「技術面で授業に使用するツールの扱いになれるようにする」ことや「クラスのリズム作り」、「学生とのインタラクティブ」が教師に必要な準備だと言う。また、学習者の受講態度をコントロールすることが欠席を減らすために有効だという指摘もあった。

5. 考察

オンライン言語教育の先行研究をまとめた PHAM (2022) によると、先行研究では、オンライン言語教育の課題は、教師に関連する問題と学習者に関連する問題がある。教師に関連する問題として、「教師の限られた技術リテラシーや技術へのアクセス」、「教師研修での ICT 使用のトレーニング不足」、「時間の問題」、「学習プログラムの設定、従来の教育スタイルがオンラインでは機能しない」、「学習者への的確な指示や意図伝授、適切なフィードバック」、「評価」が挙げられた。一方、学習者に関連する問題として、オンライン授業に対しての「学習者の過度な期待」、「学習者のレディネス」、「サイバースペースのみに存在するクラスで物理的なインタラクションの制限による学習者の参加」が挙げられた。

インタビュー調査で、協力者 3 名は、デンドログラムを見ながら、「オンライン日本語教育で教師が直面する困難」という文言から連想した事柄について言語化し自身の意識を明確化した。そのうえで、協力者それぞれが考える「オンライン日本語教育で教師が直面する困難」についての考えや捉え方を述べた。

次に、協力者たちに共通すると考えられる要素について考察する。

まず、教師 A は、インタビューの最初から最後まで共通して大きく問題視されている困難点は「教師の体力」である。また、教授法についての困難点が多く見られた。その他に、「学生の反応が見えない」という困難点も重視していた。

教師 B は、重要度順では「教材制作」が最前線だったが、インタビューの全体を通して「学生のやる気」を最も大きな問題と捉えていた。学生のやる気を喚起するために「学生がおもしろく思える魅力的なビデオ内容を作る」ことは、教師 B が重要視していた教

材・教案制作に関連する困難に関係していると考ええる。

教師 C は、「教案作り」と「クラスのムード作り」が最も大変だったと語っており、また、「学生の受講姿勢・態度のコントロール」も困難点であると考えている。

以上から、3名の教師には、共通する困難として「学習者の反応」、「学習者の認知度」「学習者の受講姿勢・やる気」など学習者を中心とした困難点とオンラインに適した教材・教案作りが共通した困難点であることが明らかになった。これらの困難点は、クラスでの対面授業にも共通する困難点であるが、オンラインの場合、学習者の反応は画面越しにししか見えず、画面外では何をしているかが分からないところや、「クラスで学習するムード」を作ることが難しいことから、学習者の受講姿勢に影響すると考えられる。そして、学習者の受講姿勢を改善するために工夫の一つとして教材・教案作りがあるため、これらの困難点は密接に関係していると考えられる。

6. まとめと今後の課題

以上のインタビュー調査から、オンラインで日本語を教える際に教師は、学生に関する問題から教師自身に関連する問題、外的要因など様々な困難に直面していることが分かった。その中でも、学習者に関連する困難点と教材・教案作りに関連する困難点は協力者3名の共通の困難点であることが判明した。また、これらの困難点は、先行研究で指摘された教師に関連する問題と同じものもあれば、「教師の体力」や「クラスで学習するムード」「学習者の反応」、「学習者の認知度」「学習者の受講姿勢・やる気」などインタビュー調査で明らかになった要因もある。本調査と先行研究を吟味して調査票を作成し調査を行った結果は PHAM（2022）に記述している。今後の課題は、困難にどう対処するかを検討し、教師研修に生かしていくことである。

参考文献

- 内藤哲雄（2002）『PAC 分析実施法入門〔改訂版〕「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 西谷まり（2013）『外国人日本語教師不安尺度の開発』一橋大学国際教育センター紀要4号 pp.3-13
- 三島浩路（2011）「PAC 分析を利用した質問紙の開発と利用―「学校機器の問題を通して」―」『PAC 分析研究・実践集 2』、pp.79-99
- PHAM HOANG ANH（2022）「オンライン日本語教育で教師が直面している困難 - ライブ配信に焦点をあてた困難について - 」一橋大学審査修士学位論文

（ファム ホアン アイン 一橋大学言語社会研究科 修士課程修了生）